

— 女子大学生に対する自由記述ならびに面接による調査から —

昭和女大(院) 堀内 かおる

<目的>わが国において、「子どもの家事労働参加」が子ども自身にどのような影響を及ぼすのか、という問題に着目した研究は、これまでほとんどみられなかった。子どもの生活経験の不足が指摘される今日において、「子どもの家事労働参加」は単なる家族の共助としてではなく、子どもの生活自体の視点から理論化されなければならないものとする。

本研究は「子どもの家事労働参加」の理論を構築するための研究の一環であるが、日本および欧米の関連領域の文献検索をふまえ、理論仮説を設定し、家事労働参加が「自立」に及ぼす影響について、心理的側面から質的データの分析を試みたものである。

<方法>(1)文献により「自立」概念を整理し、子どもの家事労働参加と「自立」との関わりについて吟味した。(2)理論仮説を設定し、以下の方法で調査を実施した。調査1：東京都内のS大学およびS短期大学の女子大学生合計222名を対象とし、自由記述により家事労働観を把握した。調査2：調査1の結果から家事労働観の類型化を行い、「生活的自立」の意識形成に影響を及ぼす要因を探るために、面接調査を行った。

<結果>①自由記述の結果、「家事」という言葉から思いつくこととして、「母」(33.8%)「女性」(31.5%)「主婦」(20.3%)が上位を占め、「生活に必要・生きるために必要」というような回答は14.4%であり、家事労働に対するマイナスの印象を持つものは26.6%であった。②自分自身にとっての家事労働とは「快適に暮らす上で必要なこと」(30.1%)と考える一方で、「母の手伝い」(16.7%)という回答がみられた。③家族の感謝・評価が得られたとき、家事労働が肯定的にとらえられていた。④面接の結果は口頭で報告する。